

日本ガス協会 広瀬会長 会見発言要旨

1. 2020年の振り返り

(1) コロナ禍での事業運営

今年のトピックスといえば、やはりコロナが挙げられる。各事業者は、ガス供給の継続は何としても守るべく、徹底した感染防止対策を行い、現在まで供給支障等に至るケースは発生していない。昨今感染者が急増しているため、引き続き気を引き締めて取り組んでいきたい。

ガス協会も対策本部を設置し、情報提供などによって各社の事業継続を支援した。また、業界としての対応のレベルアップにつなげるべく、コロナ禍における安定供給や保安業務の対応事例を整理し、会員事業者への共有を図った。

お客さま対応面では、コロナによる困窮者支援の必要性という社会情勢を背景に、ガス料金の支払い猶予を実施している。加えて、保安業務などではお客さま宅を訪問することがあるため、お客さまの意向を事前に確認の上で業務を行うなどの対応をしてきた。

ガス協会内部の運営の工夫に関しては、理事会も含めた各種会議で Web を活用した。出張が可能になった時期においても、リアルと Web のどちらでも参加可能なハイブリッド方式で開催し、これが定着している。イベントは、予定していたものの多くをオンライン開催とした。直接会えないことによるデメリットもあるが、移動時間が不要になったことで、特に遠方の事業者は参加しやすくなり、従来よりも参加者が増えるといったプラスの効果もあった。

会長会見は、一時期は日本ガス協会ビルで行うなど、感染防止を図りつつ、リアルの開催を継続した。

また、定時総会などが実開催できず、会員事業者と会う機会が減ったことから、普段接することの少ない理事会社以外の会員事業者トップと虎ノ門のガス協会の間で、Webを使った意見交換機会を設けた。これを、「密」を避けつつ「濃密な意見交換を」という意味で、「no 密コミュニケーション」と名付けた。157 事業者のトップが参加し、1 回あたり 5 事業者前後、延べ 33 回の意見交換会を開催した。地域の実状や事業活動のご苦労等もお伺いでき、新しいコミュニケーションの手法として有効だと感じている。

(2) 2050 年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現に向けた貢献の 意思表示

今年のもう 1 つの大きなトピックスは、2050 年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現に向けた貢献の意思表示である。

ガス事業者が多様な環境変化への対応を求められる中、「2050 年に向けたガス事業の在り方研究会」が、資源エネルギー庁の検討会としては約 10 年ぶりに開催されている。研究会は、「低炭素化・脱炭素化」、「レジリエンス強化」、「経営基盤の強化」の 3 つを中心テーマとして 9 月にスタートしたが、10 月 26 日に菅首相が「2050 年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指す」旨の方針を表明され、非常にタイムリーな研究会となっている。この首相の宣言は、まさに 2050 年までの 30 年間で低炭素社会と位置づけ、この 30 年間とどう向き合い、これをいかに乗り切って

「2050 年カーボンニュートラル、脱炭素社会」の実現を図っていくのか、という戦略性と柔軟性を併せ持つ問題提起である。これを受け、ガス協会も 11 月の会見で「ガス業界として、カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現に積極的に貢献する」ことを意思表示した。

加えて、先週行われた第 4 回の在り方研究会においても、会見のベースとなった案である「カーボンニュートラルチャレンジ 2050」を提示した。

この研究会は次月以降も開催されるため、引き続き積極的に参加し、国や委員の皆さんのお力をお借りしつつ、将来のガス事業の姿や役割を描いていきたい。

改めて、業界としてのカーボンニュートラルの取り組みをご説明すると、我々は2050年に向け、海外貢献を含めた3つの取組みを複合的に駆使することで、低炭素社会の深化を着実に推進しつつ、「2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会」の実現に積極的に貢献していく。

1つ目は、需要側の取り組みである「徹底した天然ガスシフト・天然ガスの高度利用」。石油・石炭からよりクリーンな天然ガスへの燃料転換、コージェネレーションや燃料電池等の普及拡大、機器の高効率化等に取り組み、まずは徹底した低炭素化を図っていく。

2つ目が、供給側の取り組みである「カーボンニュートラルガスの拡大」。メタネーションや水素利用、CCUS等イノベーションへのチャレンジに加え、バイオガスやカーボンニュートラルLNGの一層の活用など、様々な手段を駆使してカーボンニュートラルガスの拡大を進める。

3つ目が「海外貢献等の取り組み」。国内で開発した革新的なガス機器や、LNG先進国としての知見を生かしたエンジニアリング力の海外展開などにより、世界のCO₂削減への貢献に取り組んでいく。

やるべきことはたくさんあるが、それぞれの取り組みを加速するとともに、革新的イノベーションにもチャレンジしていきたい。また、2050年へのマイルストーンとして、2030年に向けた取り組みの詳細について検討を進めていく。

来年も厳しい1年になるかと思うが、少しでも良い年になるよう、我々ガス業界もさらに頑張っていきたい。

以上